

人としてのジョン・スチュアート・ミル

大 泉 行 雄

—

特定の社會状態と其の時代に呼吸する偉大なる社會思想家の思想とは、相關的關係を有つと観ることは多くの場合に於て至當である。時代の風潮趨勢が、思想家の思想に反映して、時には之を補翼し、時には之に或る方向を與ふると共に、他面思想家の思想は時代に反映して、其の時代の一般趨勢に指針を與へ之を誘導するの役割を演ずることあればである。固より思想家の思想は多岐にして、常に特定時代の保護持續のみに貢献すとは言はれない。時には之に反抗し挑戰する思想の發生も認められるけれども、之とても其の因つて生ずる所以を檢索し行けば、其の特定時代の母胎の中にはぐくまれ、成長し、然る後に、自ら母胎の批評者となり更生者とならんとするものなのであ

る。従つて、思想が特定時代の擁護者であれ、將た批評者であれ、時代と思想とは相關的關係を有つと一般的に觀察し得る。

特定の社會狀態と社會思想家の思想との相關的關係は之を移して其の思想家の個人的生涯にも認め得る。獨自的思想家は、一面自己の個人的生涯即ち私的環境を自ら開拓し邁進し行くと共に、他面彼を包圍する環境が有力に彼に作用し影響するを看過し得ない。彼は境遇を作り行くと共に又境遇に作られて行く。

斯かる思考を、社會思想家としてのジョン・スチュアート・ミルに移し來たる時、我等は此の關係がミルに於て餘りにも典型的に實證せられ居ることに大なる驚きと興味とを覺ゆる。ミルが十九世紀の波瀾極まり無き英國社會に生存して、如何に時勢に動かされたか、同時に又ミルの偉大なる社會思想が如何に時勢を動かしたか。轉じて又その私的生活を眺むる時、後が如何に彼を圍繞する環境によつて影響せられ、同時に又他面其の環境展開の爲めに如何に自ら努力したか。之等を仔細に檢する時、我等が冒頭に叙べたる命題のための最も良き例證の一つを得ることゝなるのである。社會思想家としてのミルを窺ふことは地に機會ありと信ずるが故に、茲にはミルの個人的生活の若干を寫して、環境と思想との問題に對へたい。

ミルの生涯を通じて其の思想上に力強い影響を與へた人は、必ずしも二三に限られないけれども、その中特に忘るべからざる人は、前半生に於ける父ジェームス・ミルと、後半生に於けるテラー夫人との二人である。父の思想的影響はミルの幼少年時代に於て最も重要なものであつた。

今ジェームス・ミルの生涯を概観するに、初め其の故郷たるスコットランドにて教育をうけ、牧師としての資格を得たけれども、生涯牧職には就かなかつた。蓋し父ミルは其の就學の中に如何なる教會の教義にも信仰を抱くことが能きない状態に到達したからである。「結局に於て、事物の原始に關しては何事も知ることを得ず。」との確信、従つて天啓の信仰に對する不信が其の到達した所であつたからである。

一八〇二年の頃に居をロンドンに移すに及んで父ミルの文筆生活が始められた。當時の父の生活は決して餘裕あるものではなかつた。結婚によつて子女が増加し行く一方、収入の途とした雜誌編輯の仕事が失はれて、純然たる文筆に依るの外、生計の手段が無かつたからである。去年、父ミルの耐忍不撓なる意思力と強大なる精力とは寔に驚歎すべきものがあつた。それは父の生涯を通じて

變らざる生活態度ではあつたが、殊に此の時代に於て光彩を與ふるものありと言はねばならない。ジョン・ミル當時を追想して曰く「當時の父を憶ふ時、驚畏に値する二つの事がある。一は父が貧困の境遇に在り乍ら、結婚して子女多數であつたこと、之は後年父が力説した義務及び思慮の問題と甚だ相反するものであつたこと、二は此の窮境に在つて而も屈せず、一管の筆を以て一家を支持し乍ら、終始志操高邁にして、自家の見を守り、同時に子女のために尠なからぬ教育の時を割きしこと之である」と。斯る生活上の困難と戦ひ乍ら、父は彼の出世作たる「英領印度史」を起稿し、幾多の障碍を排して是を完成することが出来た。當時父の努力は目覺ましいものであつて、自ら友人フランシス・ブレースに談つて「私は朝五時から夜十一時まで仕事を爲し續ける」と言つたといふ。

ジョン・ミルが自ら父を評した言に依れば、ブルータスが羅馬人の最後のものと呼ばれた如く、父は十八世紀の最後の人であつた。父は十八世紀の思想及び感情の色調を十九世紀に持越し、十九世紀前半の一大特徴であつた十八世紀に對する反動の、善惡何れの感化にも與らなかつた。十八世紀は偉大なる世紀、力強い、そして勇敢なる人々の世紀であつた。而して父は、その中の最も強い最も勇敢な人々の好伴侶であつたと、此の評は父ミルの性格の一面を描寫して如實たるものがあ

る。寔に父ミルは鐵の如き意志の人であり努力の人であつた。彼は主義の人であると共に、主義實踐の人であつた。其の向ふ所に横はる障碍は、何物と雖も之を排撃し打破し行かんとする性格の激烈さと意志力とが父ミルの名と共に髣髴せしめられる。此の秋霜凜烈とも例ふべき性格の峻嚴は、小ミルに對して先づ其の早教育となつて現れた。ジェームス・ミル謂へらく、

「凡そ健全なる政治組織は、政治體より總べての惡弊を除去する如く、健全なる教育組織は人間性の中より總べての惡徳を驅逐する。而も人間性は、教育と環境とに依つて限りなく變化せしめらるべきものである。人の生るゝや、その生來享くる所は、大なる差別あるのではない。嬰兒の心は恰も一葉の白紙の如く、後天的印象が、善きにつけ、惡しきにつけ、永久消え難く烙印附けられるのである。されば人間の徳性の差異は一に全く教育の如何に因るものと言ひ歸る」と。斯ゝる教育理論が實踐に移されて、ジョン・ミルの享けたる早教育となつた。父は只管に詰込主義教育の弊を避け、自らの能力と判断とを働かしむることに意を用ひた。而して之が爲めには、寸分の容赦をも與へなかつた。「父は教授の一切に於て、私の爲し得る最大限を要求したのみならず、到抵不可能の事までも要求した」との述懐は最もよく此の間の消息を傳へる。然乍、父ミルの教育法は唯嚴格のみを特徴とするものではない。他面驚くべき耐忍と周到なる用意とが存在した。小ミルが希臘語を習

ふに當り、父が「印度史」を執筆してゐる同じ机に書を並べ、當時希英辭典がなかつたため、屢々父に質問して仕事を妨げたが「人間中の一番痼癩持の一人たる父が溫和しく辛棒してくれた」と言はれてゐる。父は又早教育をうけたる者が、自分と他のを比較して自惚を感ずることをば衷心より愧した其のために、屢々子を誡めて、汝が他の同じ年頃の少年と比較して智識優れりとしても、それは少しも汝の偉大なことを意味しない。單に夫れを教ゆることが出來、又そのために時間と勞力を喜んで與へた父を有つたといふ特別の事情に依るものである。従つて斯る便宜を有たぬ人より多く知ればとて決して汝の稱賛とはならず、寧ろ知らざるものが甚だしき恥辱なのであると訓した。父の用意の深きこと正に見るべきである。

ジェームス・ミルの性格描寫より、吾々が印象づけられる事は、その人と爲りの峻嚴さと情感の缺除といふことである。父は倫理說に於て快樂說を採り、宗教に於ては、曩にも叙べた如く天啓的宗教の信者ではなかつた。而も、その生活態度は寧ろストア哲學者的で、希臘哲學者の風貌を忍ばしむるものがあつた。「父が子供達に對する道德上の關係に於て、一番缺けてゐた要素は優しみてあつた」と言ひ、或は又「自分は嘗つて少年たりしことなかりき」(I never was a boy.)と言つてゐる。小ミルの言葉は、子が父に對して有つた不滿の一端ではなかつたか。父の感情の缺除に就ては、子

は若干の辯護を試みてゐる。即ち父は寧ろ豊かな感情の持主であつたが、之を外部に表現することを恥ぢ自ら感情を枯死せしめたのである。之も一つの觀察である。

私見によれば、人の情感の豊饒及び缺除は、固より天性による所大なるも、亦彼が育てられたる境遇に影響せらるゝこと少しとしない。青壯年時代に於て、生活のために苦慮し、只管に經濟的脅威と抗爭して之を打開した人々には屢々性格上の冷徹さと意志力の烈しさを認め得る。惟ふに之は情感の缺除と言はんより、それを醸成すべき機會の缺除といふべきであらう。ジエームス・ミルに就いても一部は此の如き見解が加へられるのではなからうか。

三

嚴格なる父の膝下に在つて、試みられたる早教育の實際は「自叙傳」の中に詳しく誌されて居るが故に茲には必要なる最少限度の叙述と「自叙傳」に無き興味ある事項の記述に止める。

ミルは三歳にして早くも希臘語の學修を始め、八歳頃には、ヘロドタス、ゼノフォン、プラトールなどを始め、好んで歴史書を繙いた。八歳より十二歳にかけては拉典の書、希臘の作家等を渉獵した。ヴァーヂル、ホレース、ルクレチウス、キケロを始め、ソフォクレス、ユーリピデス、ホーマ

ト、ツキヂデス、デモステネス等其他多數を擧げ得る。科學的論文として最初に讀んだものは、アリストートルの修辭學であつた。

十二歳の頃よりは學修に一段と深さを加へ、形式論理に進みアリストートル、ホツブス等を讀んだ。經濟學の全過程を授けられたのも此の時代である。

十五歳の頃、ジエレミー・ベントムの兄弟にて當時佛蘭西に在つたサミュエル・ベントムに招れて、一年ばかり佛蘭西に遊ぶ機會を得た。此の佛蘭西行は、後年のミルの思想發達に重大なる關係を有つものと見なければならぬ。一つには、ミルが藏する豊かなる情感が南歐の自然に依つて育くまれ醸成せらるゝ機會を得たこと、二つにはサン・シモンの如き佛蘭西社會主義者に會見の機會を得て思想的感化なうけたことである。佛蘭西滞在の一年間もミルの嚴正なる學修は寸時も緩められなかつた。今夫れを示すべき二三の日記を掲げる。――

×六月十七日、早朝起床

佛蘭西語練習題を書き、ヴォルテールを讀む。日曜なれば、農夫達、家の前の廣場で踊る。

朝食後、練習題を終り、家人と共に廣場に出る。ジョージ君(サミュエル・ベントムの長男……

筆者註)から植物學の話を聞く。

佛蘭西に到着後の費用計算、百四十八フラン。

×七月五日、五時起床

雨烈しくして水浴に行かれず。

ヴォルテール五章。七時半より八時までジョージ君に佛蘭西語練習題の訂正をうく。音楽教師來る。

九時半より新らしき佛蘭西語練習題に入る。室内整理。十一時十五分よりルーシヤン（希臘の諷刺作家…筆者註）を始め *Necyomania* を終る。ルジヤンドル（教學者…筆者註）の五設題。

著者が他の幾何學者に卓越せることを今更乍らに感歎す。音楽實習。

トムソンの化學。化學表作成。

三時十五分よりウエスト（數學者…筆者註）の問題を始め、嘗つて不可解なりしもの二題を解く。

佛蘭西の五十八河川に就き其の流域と流域の都市を示す圖表作成。四時夕食。化學表終る。舞蹈。

×七月七日、五時四十五分起床

七時までヴォルテールを五章。七時十五分までヴァーヂルを四十六行。八時までルーシヤンの

Jupiter Confutatus 家事手傳。九時まで音楽理論。

九時半までルーシヤンを續ける。朝食後十時十五分に之を終る。洋服のことで外出。

十二時十五分までトムソンを読み圖表作成。

地理學その他を五時まで。音楽實習のため始めて女教師の許に行く。舞踏練習。

佛蘭西より歸へつたミルは、再び従前の學修生活に立戻つたが、當時のミルに最も有力なる影響を與へた書物は、デュモンの「律法論」であつた。此の書はベンタムを祖述解説したもので、之によつて、幼少時代よりベンザミズムに養育せられた自己の思想に統一を與へることが出來た。この事より、我等は二個の考ふべき問題に遭遇する。一つはミルが生れ乍らにして功利主義の闘將たる環境を有ち、その點に於て他の何びとよりも有利なる條件を持つたこと、二つは、その事か又終始ミルの思想を制約し、時に功利主義以外の思想に目覺むることあつても敢然として功利主義の霸絆を脱却し得なかつたことである。功利主義の領域内部にのみ呼吸せんとする間は、ミルは他の何びとにも優つて之が寵兒であつた。然乍、一度之より離脱せんと欲した時、功利主義は執拗打拂ひ難き束縛となつた。

我等は轉じてミルが享けたる早教育に就て一言しやう。斯る早教育の方法に就ては、人に依つて尠なからぬ異議があらう。ベーンの如きも之に關し、其の幼少時代に行はれた讀書が、どの程度まで咀嚼せられ消化せられたかに就ては疑を挾んでる一人である。即ちミルの幼少時代の讀書は、馳け足で皮相的に終り、屢々單に讀書したといふに止り、その中より充分なる滋味を攝取し得たとは斷言し得ないとなし、幼少時代の多讀には、時の浪費のあつたことは争はれぬ事實であると觀察してゐる。

然らばミル自身は如何に考へたかと見るに、彼は自己の實驗を以て、通常成人者のみが授けらるゝ所謂高等教育なるものも、一部は幼少年時代に與へられ得るものなることの證據と見て居る。ミル自ら言ふ所に依れば、自分の天性享けたる活動力と理解力とは決して優秀なるものではなくて、寧ろ人並以下のものであつた。故に自分の成し得た所は通常の智能と健康とを有つ總べての子弟に可能な所である。自分が多少なりとも仕事を成し得たとすれば、それは父が與へてくれた幼少時代の教育によつて、他の同年輩の人々よりも二十五年先きに學界に乗出した事によるのである。彼は父の教育法の嚴格さを叙べたが、同時に又「彼の爲し得ぬことを爲すべく要求せられぬ生徒は、決して彼の爲し得る限りを爲さぬものである」と言つてゐる。

我等はベーンの批評の一理あるを認めると共に、ミル自身の言葉の眞實をも疑はぬ。唯私は、ミルが、自分のなし得たるが如き所は、世の普通の少年少女にも等しく爲し得る所であると言つた言葉を考へたい。此の言葉は若干の謙遜を含むとしても、ミルが天才の人ではなくて、努力の人であつたことには疑なきことを示す。唯私にとつては、人の努力性も亦一つの天分ではないかと考へられるものなのである。父ミルの如き峻烈なる膝下に在つて良く之に耐忍し努力し得る子女は世に幾人あるか。ジョン・ラスキンの言葉に言つてる「馬でも人でも水の側まで引いてきて若し彼等が欲する時に水を飲ませよ。教育を望む子供は教育によつて改善せられるであらう。併し教育の嫌な子供は教育によつて辱かしめられるだけである」と。之は又考ふべき一面の理ではないか。嚴肅なる父の下に在つて、良く之に堪へ、父の期待に叛くことなく大成したジョン・ミルは、世にも稀なる性格の所有者と言はねばならない。それは、普通の子女の容易に堪え得る所ではなく、ミルの如き特殊なる性格者にして良くし得た所ではなかつたか。我等は單に天性の智能のみに止らず、努力性耐忍性も等しく天分の一つとして考へねばならぬと思ふからである。

二十歳を前後とするミルの生活は、極めて華々しいものであつた。功利主義の論客として、堂々と評論界に乗出した時代だからである。或は新聞社を通して、或はウエストミンスター評論に據つて、或は又討論會、公開講演會を通して其の宣傳運動が試みられた。最大多數の最大幸福が、社會的活動の目標であつた。而して、此の目的の爲めに努力精進することは、即ち又自己自身の幸福であることを信じ、社會の改良進歩に自己も亦一臂の力を致し居ることを自覺して活動し得た間は、ミルの精神状態は愉悅に充ち、その生活は幸福に思はれた。

然るにやがてミルの精神には、怖るべき沈滞の日が訪れて來た。彼自身所謂「我が精神上の危機」と稱したものが即ち之である。此の精神上的の沈滞が襲來するに及んで總べての悦樂と感激とは失はれ、只管に求め來つた目標は何處へか失はれ、確固たりし信念が砂よりも猶脆く崩壊してしまつた。ミルは自ら問ふた、汝が目標とする人生の目的が達成せられ、諸制度及び人心の改善が成就せられた時、それで汝は満足と幸福とを味ひ得るかと此の問ひに對して、一つの抑へ難い自覺が否と答へたのであつた。茲に於てか、生存の目的の總べてが失はれて、陰鬱な日が彼を訪れた。

ミルが遭遇したる精神上の危機に就ては種々なる見解が試みられてゐる。彼は其の前年に、ベトナムの證據論を編輯した。之は五卷の大冊より成り、彼にとつては並々ならぬ心身の疲勞を齎らし

たものである。されば、ペーラの如きは、肉體的衰弱を重要視し、之が精神に及す影響に、世人の注意を惹かんとして居る。然るにコートニーは之に反して寧ろカーライルの批評の適切なることを裏書して居る。即ちミルは、此の時に至つて彼自身を制約するベンザミズムの苦痛を自覺した。此の制約より離脱せんとすることはミルにとつては、大なる心的革命と言はねばならない。彼は此の心的革命を完全には成就し得ずして、生涯功利主義の羈絆を逃れ得なかつたけれども、而も其の精神的過程は、多分に之が脱却に傾きつゝあつた。舊套を脱して新らしき世界へ移らんとする時に、感じなければならぬ苦惱が即ちミルの精神的沈滞である。我等もカーライルと共に其の觀察の適切なるを思ふ。蓋し自叙傳に於て、ミル自ら誌す所のそれ以後の心的變化が之を實證するからである。

ミルの精神的沈滞は、その後マルモンテルの追憶記を讀んでより、次第に恢復して行つたと言はれるが、其の結果性格と思想との上に生じた影響は二つある。一つは固有なる形に於ける功利主義よりの離反である。是に於てミルの思想は、カーライルの無我説に甚だ接近したことを示す。幸福は之を直接の目的としない時にのみ達せられると言ひ、幸福を得る唯一の途は幸福といふことを忘れて、それ以外の目的を人生の目的とするに在るとの後の言葉は、衣裳哲學に於けるカーライルの

言葉を想ひ起させるものがある。曩にも關説した如く、ミルは遂に此の無我説に没入する程の悟界には達し得なかつたのであるけれども、彼の功利主義がベントムのそれに比べて著るしい差異を示すものであり、幸福と満足との混同を指摘して、不満足なること即ち不幸福とは言はれずと唱へ、高尚なる精神的満足の追求を主張した如きは、即ち右の心的危機を經過せる後の過程を示すものと觀られる。

第二の影響は、ミルが人間の内的修養の必要なことを痛感した事である。換言すれば、能動的なる智力の増進と、等しく受動的なる感情の培養の必要を悟つた事である。此の内的修養即ち情感の醸成の必要は、ミルを驅つてワーズワース、コールリツヂ、ゲーテ等に近づかしめたのであつた。而して又、ミルの内部に藏されたる情緒に藏されたる情緒的感情を外部より俗育し助成したものは即ちテラー夫人である。嘗つて、少年の日に南歐ピレネー山系の雄姿に接して感得した情感が再び現はれて人的關係となつたもの、即ちミルとテラー夫人の交友であらねばならぬ。

五

ミルが始めてテラー夫人に紹介せられたのは、一八三〇年で其の時ミルは二十五歳、夫人は二

十三歳であつた。テラー夫人は、パークスゲートのトマス・ハーデーの娘で、ハーデー家は數百年間、其地の領主であつたが此の頃には家政紊亂し、世襲財産さへ失ふに至つた。斯かる事情のため、齡漸く十八歳に達したばかりのハリエツト(即ち夫人)は、早くも藥品卸賣商ジョン・テラーの許に嫁いだのである。夫人が後に、フォックス氏に「十八歳といふ様な、世の中の事も碌々知らぬ年で人妻となつたことは口惜しい」と述懐したことを思へば、此の結婚は必ずしも夫人の意思を尊重したものではなかつたと思はれる。殊に父なる人は、頑固な專制的な人であつたと言はれば、ハリエツトがテラー氏の許に嫁いだのも、父の嚴命に服したためか、或は一家の負擔を少くせんとの犠牲心によるものであつたかも知れない。

テラー氏は、彼と夫人との間に生れた娘のヘレンが言ふ所によれば、極めて善良な優しい人であつたらしい。唯夫人が藝術に深い憧憬を抱き、強烈な感情を明敏な理智の所有者であつたのに比べて、テラー氏は斯かる才能の人ではなかつた。従つて夫人の内的要求は家庭内では満足せしめられなかつたのである。それ故に、同じ思想傾向を有つミルと近づくに及び、二者の間に親交の醜されたことは一面無理からぬ事情もある。

ミルとテラー夫人の交友が次第に深くなり行くにつれて、夫人がテラー氏より離反し行くこ

とは自然の勢であつた。夫人は遂に、その良人に對する愛情よりも、ミルに對するその深くして強きことを自白したが、良人は只管にその心を齷がへして己に歸へり來べきを主張した。然乍、夫人は、この感情を滅却することの不可能を誓つたために、二人は暫く別れて、夫人は半年をパリで送つた事もあつた。結局に於て二人は友として仲間として暮すことに約束して和解が出来た。惟ふにテラー氏は尠なからず寛量の人であつたらしい。

一八四九年夫人は其の娘と共に伊太利に旅行中であつたが、テラー氏は病に侵されて、再び立つ能はざることを見つけた。依つて夫人を迎へ、夫人は急遽歸へつて看護し、その看護をうけつゝ、良人は世を去つた。テラー氏が病革まるや夫人手づからの看護を求め、又其の遺言状には全財産を妻の所有に歸する旨認められてあつたことは、氏が死に至るまで夫人を信頼して居たものであると言はれてゐる。越へて一八五一年夫人は遂にミルと結婚した。

ミルかテラー夫人と相見えてより、その結婚するに至るまで實に二十年の歲月が流れて居る。而も二十年の永き試練を経て漸くに到達し得た此の結婚生活は、繼續の時から言へば僅かに七年餘りの短いものであつた。一八五四年に短論文として計畫せられた「自由論」は其の後ミル夫妻の協力に依る一卷書のごとして企てられ、一八五八年より五九年に至る冬にかけては南歐に旅して其の校訂

を試みる豫定であつた。然るに不慮の不幸が突如としてミルを襲ふた。南歐モンペリエに赴く途中、アヴィニオンに於て夫人は肺充血のために此の世を去つた事である。夫人の死が如何にミルを悲歎の淵に沈ませたか、思ひても尙餘りあることである。友人ソントンに妻の死を報いた一節に叙べてる――

「此の旅行の動機となつた希望は根底からくつがへされてしまつた。私の總べての感情の伴侶であり、總べての最善なる思想の鼓舞者であり、總べての私の行動の嚮導者である妻は死んでしまつた。妻は此地で烈しい氣管支炎と肺充血に侵かされた。此の地の醫者は彼女の爲めに何事も手を竭くすることが出来なかつた。そして以前一度彼女の生命を取りとめてくれたことのあるニースの醫者が到着せぬ中に總べては事切れてしまつた。

私が今後再び、公私の仕事に堪え得るや否や疑はしいと思ふ。と云ふのは私の生活の發條スプリングが壊れてしまつたからである。然し自分は、何等か有用な事を爲さんとする企を抛棄せぬことによつて、妻の希望をば出来るだけ良く實現するだらう。私は君が同情を寄せられることを疑はぬ。だが、若し君が、彼女が如何なる女性だつたかを知るならば、君は如何なる同情も充分とするに足らぬことを感じた事と思ふ云々。」

夫人の死はミルにとつて一大打撃であつた。彼はアヴェニヨンの近くに假寓を求め、夫人の跡を弔ひ乍ら殘生の大部分を其處で送つた。ミル自ら餘の何れの書よりも永く生命を保つべしと自負した「自由論が」公刊せられたのは翌五九年であつて、之は夫人への手向であると共に、思出の記念でもあつた。それには、讀者の心を抑へずにはおかぬ有名なデデイケーションがある。――

「私にとつて靈感を與ふる人であり、最も優れた私の著作に於て、時には共著者であつた彼女――私の知友であり、同時に伴侶であり、その眞理と正義に對する高邁なる觀念は私に最も強い刺戟を與へ、其の稱賛は私にとつて大なる報償であつた彼女――のいとしくも痛ましき憶出に此の一卷を捧げる。」

多年私を書いて來た總べての著作と同じく此の書は私のものであると共に又彼女のものである。けれども此書は茲に見られる如く、彼女の測り難き利益ある校訂をうけたこと極めて不充分である。最も重要な或る部分は、更に周到なる検討を繰返すために留保して置いたのであつたが、それも今は如何とも爲す術がない。地下に眠れる彼女の、偉大なる思想と高尚なる情感との半ばなりとも、私が世に取次ぎ得たならば、私は彼女の殆ど比類なき智力の鼓舞と助力とを受けずに今後書く如何なるものよりも大きな貢獻を世の爲めに與へ得たであらうが。」

ミルは又「自叙傳」中にも夫人を稱賛し「人生に於ける私の目的は同時に彼女の目的であつた。私の仕事は彼女に依つて分擔せられ、同情を與へられ、かくて彼女とは離れ難き聯想を有したものであつた。彼女を追憶することは、私にとつて一つの宗教であり、彼女を稱賛することは、私にとつて其の生活を規律する基調であつた」と叙べて居る。寔にミルはテラー夫人を以て一つの完全人格と認めて居た。ミルによれば夫人は凡ての善き性質を一身に兼ね備へ、且つ豊富なる情藻の所有者であつた。シエレーの如きすらも、夫人に比べては、小兒の如きものであつたとさへ云つてゐる。

ミルをして、此の如くに絶大の賛辭を叫ばしめ、最高の敬愛を拂はしめ、全心的傾倒を覺えしめたテラー夫人は、冷靜に之を見て如何なる人であつたか。ミルを研究する諸家の見解は、夫人を以て左程の才援と看做ぬのが一般である。之に關しては、既に大内兵衛氏が「ミルとテラー夫人」(雜誌「我等」第三卷第一號大正十年一月)なる一文に記述せられて居る故に、茲には夫人の評價に關する詮索を總べて右の一文に譲つて敢て試みない。我等は唯此の交情に對する若干の感想を試むるに止める。

テラー夫人とミルとの交友は當時の世評に上り公衆注視の的となつた。ミルの親友、近親等も

彼が人妻と昵懇に陥り、交情を深め行くことに憂慮と反感とを抱いた。之がためにミルは友人及び友人の夫人等と交際が疎くなり、父ミルも亦子の行狀を非難して止まなかつた。之等の非議をうけ乍ら、ミルは敢然として其の所信を曲げなかつた。「自叙傳」中に公言して、吾等兩人の交情は強き愛着と隔てなき親密との關係以上の想像に對しては些の根據も與へぬこと、吾等は彼女の夫の面目及び彼女の名譽を傷けるが如き行動は斷じてなかつたと言つてゐる。斯かる言葉も之を疑へば、疑の餘地は多分に存し得るであらう。然乍、筆者は兩者の交情に就て微細なる探索を好まない。私は寧ろ、ミル自身の右の公言を、そのまま素直に受容れんと欲するものである。蓋し愛戀と云ふが如き、極端に主觀的なる關係に就ては、屢々第三者の伺ひ知るべからざる靈妙なるものが存在することを思ふからである。

私は又思ふ。ミルの思想的成長を對象とする我等には、テラー夫人が客觀的に幾許の評價を與へらるべきかと云ふことは、さして重要な事項ではない。我等にとつて重要なことは、夫人がミルにとつて如何なる役割をなしたかの一點に存する。即ち夫人がミルにとつて何であつたか、問題である。

ミル自らの言ふ所によれば、その著作の中の或るものに精彩を與ふる所の重要なる思想は夫人に

基くものであると云ふ。例へば、經濟學原理中の有名なる一章「労働者の蓋然的將來」の如き、「自由論」の如き、「婦人の隷従」の如きその主要なるものであると言ふ。之等の著作に現はれたる思想が獨り夫人のみから暗示せられたとなすことは餘りにミルを輕視することゝならう。寧ろミルに存した、この傾向を夫人が一層に助長し鼓舞したと見るべきであらう。而して、之より我等の知ることとは、人生に於ける理想の追求及び社會改良への傾倒なる熱情的方面に於て、夫人の力が與つて貢献した事である。前半生の偏理智的であつたに對し、夫人の出現は之を融和したのであつた。

六

ミルの私的生活を圍繞する環境の觀察と、その思想發育に對する關係とは凡そ上來叙ぶるが如きものである。之によつて我々は、境遇と思想との問題に就ての一例證を提供し得たりと信ずる。而して又之に依つて、人としてのミルの一面が伺ひ知られたりとも信ずる。

今此の一篇を終るに當り、若干の概括的記述を加へて結語としたい。

ミルは其の生涯を通じて努力の人であり、思想と性格との二方面に於て進歩的開拓的人であつた。其の品性に於ては異常の高邁さを有ち、情感に於ても豊富さを有つた。その進歩的にして開拓

的なる態度は、彼の受容性の大となつて現はれてゐる。ミルを評する人が屢々言ふ如く、ミルは獨創の人ではなくて集大成者なりとの言は一面に於て此の受容性の大なることを證するものと言はねばならない。彼は一方に於て、その父及び先學の徒より繼承したる傳統的旗幟を擁しつゝも、他方之に反對して勃興し來たつた新らしき思想にも無關心ではあり得なかつた。彼の進取性と包攝性は夫れをも自家體系中に攝取せんと欲した。それ故に、其の思想には、時に一貫的脈理を缺き、矛盾とも見らるべき節々の存在を發見せらるゝのである。然し、ミルの書中に、矛盾を指摘するは容易であるが、之が精神的成長の證左たることを看破するは容易でないと言つたコートニーの批評こそ味ふべきものではないか。

ミルが努力の人であつたことは、幼少時代からの學修に依つて充分の證明が與へられるが、之をスペンサーと對比する時、一層明瞭ならしめ得るであらう。ミルは絶えず他人の書を読み智識の擴充を計つたが、スペンサーは自己と相容れた思想には全く目をくれず、讀書することも亦少なかつた。彼は生涯を通じて、重要な書物と雖も一時間と續けて讀むことが出来なかつたと言ふ。スペンサーの哲學は所謂研究に因るのではなくて、自らの腦裏に湧き出でたものに外ならない。彼は自分が考察した問題には、深い蘊蓄を有つてゐたが、其の他の事には甚だ無智であつた。ジョージ・エ

リオット嘗つて、偉大なる思索家には、その額に深い皺の刻まれてゐるのが常であるのに、スペンサーは無い故、その理由を問ふた。之に對してスペンサーは「自分は決して困惑することがないからだ」と答へたと云ふ。蓋し彼は問題を解くに當つて、之を強ひて熟考することはしなかつた。若し力の及ばぬ障壁に衝突すれば、それを側に置き、進んで解決しやうとは試みなかつた。然し、それを全く忘却したのではなく、胸奥の一隅に秘め置き、かくて他の問題を考ふる中に、次第に初めの難問に微かな光明が見え出し、次に輝きは強大となつて、やがて時の経過が奇蹟的に釋然と問題を氷解するのであつた。困惑もなく、意識的努力もなく、烈しき心勞もなく問題を取扱ふスペンサーは、文字通りに天才型の人であつた。ミルとの對照に於て吾等は性格の差異に驚く。ミルが好んで口にしたモットーは、「何人も働くことの出来ない夜が來るぞ」(The night cometh when no man can work.)と言ふ語であつた。之に依つても其の努力型性格が明確に印象附けられる。天才て言言葉に最も縁薄き吾等は、ミルの不撓的態度の中にこそ、一入の慰安と教訓と親密とを見出す。彼がこの世を辭するに當り、最後に残した言葉は「余が仕事は終りたり」(My work is done.)と云ふ一句であつたと傳ふ。之は其の奮闘生活に對して、自ら與ふべき慰藉であり満足でなくて何であらう。ミルの性情は清廉にして高潔であつた。彼が立候補の一挿話は之を證して餘り有るものであら

う。彼が薦められて下院議員候補者に立つた時、彼は豫め次の事を公開した。自分は議員たらんことを自ら希望するものではないこと、候補者は自ら運動すべきものでもなく、運動費を用ふべきものでもないこと、自分は此の何れをも爲すを欲せざること、假令當選することあるも、選挙人等の地方的利益に時間と労力を費さざること等即ち夫れであつた。而して、自らは選挙の一週日前まで何事も之に關係せず、その時になつて二、三の政見發表を試みたに過ぎなかつた。此の如くにして當選し得たことは、當時の英國に於ても一つの奇蹟であつた。或る人は、かゝる綱領を以てしては當選の見込なしとさへ斷言したと言ふ。

ミルは又其の所信を公表するに當つて、之を赤裸々に持出だし、少しの僞瞞的粉飾をも試みなかつた。彼は或る小論の中に、労働者階級の一般に不正直なことを公言した。之が労働者階級の反感を買ひ、労働者の集りたる一集會に於て、かゝる公表をなせりや否やと詰問せられた時、彼は躊躇なく「余はなした」と答へた。その眞摯なる態度が反つて全會集をば惹附けて、思はず拍手せしめたと云ふ。今日我等が普通選挙の緒に到達しつつも、猶障害簇出して、理想選挙の境を遠ざかること甚だしい時に、右の挿話は我等に考ふべき多くのものを與ふるではないか。既に半世紀餘りの昔に於て、典型的理想選挙を實驗したものがミルだからである。

ミルが情感の人であつたことも之を説いた。その熱情には、假令カーライル、ラスキンの強烈さを缺いて居つたとは云へ、社會改良の思想に傾倒する強さを有したことは争はれない。されば人あつてミルを評して言ふ「ミルにも優る天分豊かな哲學者は他にあるべし。ミルにも優る感情の均濟に悟入し得たる哲學者は他に見出さるべし。されど人道主義の福祉をば、かくも深く心底に秘め、不撓不斷の努力もて同胞の進展に身を捧げたる哲學者は、他に求むること至難なりと信ず」と。社會思想家として又社會改良論者としてのミルの面影は、評者の言葉の中に躍如たるを認め得る。之筆者が他の機會に於て、社會改良論者としてのジョン・スチュアート・ミルを伺ふに至りたる所以である。

(註一) 社會改良論者としてのミルに就ては、拙稿「ミルの社會改良論」(國民經濟雜誌、第四十五卷第三號以下)を参照せられ
たし。

(註二) 本篇參考書として用ひしもの左の如し。

J. S. Mill: Autobiography

(石田、今泉二氏共譯、「ミル自叙傳」)

A. Bain: J. S. Mill: a criticism.

W. I. Courtney: Life and Writings of J. S. Mill.

Letters of J. S. Mill, edited by H. Elliot.

L. Stephen: English Utilitarians, vol. III.

J. S. Mill: Utilitarianism

後 書

一九二三年と言へば、今より數へて五年前であり日本流に言つて大正十二年に當る。そして此の年は丁度アダム・スミス生誕二百年に相當して居り、我が國の學界に於ても、スミス記念の催が盛大に行はれたことは、今尙人々の記憶に新らしき所であらうと思ふ。然るに、スミス生誕二百年に當つた一九二三年は、何たる因縁か、リカードの没後百年に當り、更にミルの没後正に五十年に相當する年であつた偶然と言へば、唯それだけであるが、正統學派の碩學が斯くも不思議な巡り合せにあることを、その時私は奇異に感じた。

當時私は一介の學生であつた、ミルの生涯並に思想に興味を感じ、且つ思ひをひそめて居つた頃とて、ミルの五十年忌を記念したい氣持に驅られた。そのために「ジエ・エス・ミルのグリーンプス」なる短文を草し、時の小樽新聞編輯者の好意に依つて三回に渡つて同紙上に掲載せられた。けれども、その一文は題名が既に示す如く、極めて簡單な一瞥に過ぎず、筆者として又不満なものであつた。今「商學討究」編輯者の好意により、ミルの私的生活に關する詳論を試み得たことは、筆者の本懐とする所である。私は此の機會を與へられた本誌に謝すると共に、先の不備なる一文に代へて、若干纏りたる一篇を公にし得たことによつて學問的負擔の輕減を覺ゆる。

